勉強会・研修会で学んだこと。。。

title: 特別支援教育講座第3回講話を聞いて

この記事は、以前に書いたものですが,アドベンチャークラブのHP内、「kazuの情報最前線」でのkazu先生の記事も、ぜひお読み下さい！http://geocities.yahoo.co.jp/gl/adve_club

去る7月15日、私が役員を務める
NPO石巻広域アドベンチャークラブ　の
特別支援教育講座　第3回講義が開催されました。

今回の講師は　デクノボー先生(もちろんハンドルネームですよ♪)

デクノボー先生は、主に重心障害児者を支援なさっている方で、
某大学や福祉系専門学校のの非常勤講師であり、
障害児者支援団体の顧問を務めていらっしゃる、大変多忙な方です。
私は初めてお会いしたにもかかわらず、その気さくなお人柄と、
何より、時々聞かれる「関西弁」に、勝手に親近感を覚えてしまいました♪(私は四国出身者！)
さらに、今回の講話は、まさに「そうだよな～！！」と思うことがたくさんあって。
うまく伝えられるかわからないけれど、ぜひみんなにも聞いて欲しい！
ので、記事にいたします。
※私なりの解釈が加わっています。その点をご理解ください(_ _(--;(_ _(--; ﾍﾟｺﾍﾟｺ

『人間、社会、そして障害者とは
ー親に向けての支援のあり方を通してー』と題された今回の講話は、
教員はじめ、教育関係者を対象としたものですが、
私のような障害児の保護者も多数参加しておりました

まず、①障害者の自己決定権と支援の関係について
障害が重ければ重いほど、支援の量は増える。

それに伴い、障害者の自主性・自己決定権が少なくなる現実のお話。
自主性の主体性を考えると、YES　OR　NO　のような二者択一の選択肢では主体性は育たない。
3つ以上の選択肢があって初めて、「比較」が始まり、主体性が育つ。

これは、自分で決めさせる、意志表示をする、を目的とした指導を行う場合に、

「やりますか？」「やりませんか？」と言うような「YES」「NO」を問うたり、
「A」「B」どちらが良いですか？と言うように「二つのうちの一つ」を選ばせるのでは、
「どちらも好きじゃないけれど、Aは嫌だから、Bにしておこう」と思ってBを選んだ場合、
Bが好きだから選んだと言うわけでは無いのに、この子は「Bが好き」などと言った誤解を生む。
3つ以上の選択肢があって、初めて子どもは「比較」することを始める。そして自己決定する。
自主的に選ぶと言う場面が生まれる。

そうだよな。どんな場面でも「行くか、行かないか」とか
「食べる？食べない？」なんて聞くことが多いよな。と思ってしまった。

食べないからきっと、おなかが空いてないんだわ、とか勝手に思ってました。
でも、そうじゃないよね。おなかは空いているけれど、それは嫌いなものだから食べたくない。

それしかないんなら、いらない。そんな気持ちだってあるよな。
「どれにする？」と言った聞き方をしてやらなければならないな。と思いました。

次に②障害児を持つ親の受容能力への心情の層過程模式図　について
これは資料に、Ⅰ・ショックの時期　Ⅱ・否認の時期　Ⅲ・悲しみと怒りの時期
Ⅳ・適応の時期　Ⅴ・再起の時期　等の親の気持ちの移り変わりの図式が描かれていました。

しかし、お話の内容は、その図式にそってどうとか、こうとかと言うことではなく、

『親の気持ちは、こんな風に階段を上るようにうまくは行かない!!』と言うものでした。
親の気持ちは「行きつ戻りつ」の繰り返し。「もう大丈夫」なんて言葉は無い！
それが人間なんだ！と。
そのゆらゆら揺れる親の気持ちに寄り添い、付き合ってこそプロの教師だと！
親が育たないと子どもは育たない。

学校内で机に向かって一生懸命勉強する子どもたちの後ろに、
常に親が存在していると言うことを忘れないで欲しいとお話されました。

学校は『子どもの教育権を守る』これは、当たり前の基本。

例えば、毎日の送迎を行っている親が具合が悪い、都合が悪い時に
学校はどうしますか？
「〇〇君はお休みです」などと言う馬鹿な話は考えられない。
誰のための教育権なのか。学校は親のために存在するんじゃない！とお話されました！

「親がうるさいから、とりあえず。。。」と言うような考えではいずれ元に戻ってしまう。
学校全体、教師全体の意識のレベルアップが必要なのではないか、とも。

教育を受ける権利は障害の有無にかかわらず、誰にでもある権利。

私たち親は、間違っても「学校と保育所」を同じに考えてはいけない。
学校は教育を受ける場所である。しかし、特別な配慮が必要とされるわが子達をお預けするには
それなりの覚悟も必要なのだ。
ああしてください、こうしてください。と言い過ぎる親がいるのも事実。

私だって、言葉を持たないKを手元から離す時間を不安の中で過ごしている。
だから、先生には「Kの身になって考えてください」とお伝えしている。

しかし、残念ながら、親と先生との間に「言葉の壁」が存在するのも現実なのだ。
そして、

③コミュニケーションの背景について
AさんとBさんの関係
AさんにはAさんの辿って生きてきた「過去」があり、Aさんの考える「未来」がある。
BさんにもBさんの辿って生きてきた「過去」があり、Bさんの考える「未来」がある。
それぞれが、よりよい未来を想像し、それに向かって一生懸命頑張っている現在がある。
Aさんの考える『思い』とBさんの考える『思い』が同じ場合であっても、
すれ違うことはある。過去が違う人間同士、同じ言葉を使っても「意味」（背景）が違う場合がある。
というお話。

例えば「がんばって！」の一言。
普通に、人並みに頑張ってきたAさんが、
死ぬほど頑張ってきたBさんに「頑張って」と声をかけた場合、Bさんにとっての「頑張って」は
励ましにはならない。なるほど。。。そりゃそうだ！と思ったね。

私だって、どん底に落ち込んでる時に「頑張って！」と言われるより
「休んで良いよ」と言われたほうがずっと楽だった経験もある。
もうちょっと頑張らなくちゃいけないな、でもなんか気が向かないな、なんて思ってる時に
「頑張らなくちゃダメだよ！」ってカツ入れてもらうと「おっしゃ～～！！」って思ったりする。

その時の状況によっても受け取る側の意識は変わる。

デクノボー先生は
たとえば、学校と保護者との間にすれ違いが生じる場合も多い。
そんなとき、「話せばわかる」というものではないとお話された。
しかし、「話さなければわからない」とも。
「より、多く対話することで、言葉の意味の違いを埋めていくことが大切。
努力すれば理解してもらえるではなく、相手からの情報発信を受けた時、かかわりあい、
育ちあい、コミュニケーションがうまれる」と。

何度話してもわかってもらえないとき、私は「もう、いや！話したって時間の無駄！」とよく思う。

そこで話し合い事を止めてしまい、諦める。
でも、本当に子どものことを考えたら、あきらめてしまってはダメなんだなと思いました。

話し合い、理解しあう。これって、話せばわかる、お互いを認め合えばよりよい関係が築ける、
なんて簡単なものじゃなく、時間と忍耐力が必要なのかもしれない。
でも、自分の想像する「子どもの将来像」にはたくさんの理解のある支援者に囲まれ、
笑って生活する光景ははずせない。Kには何歳になっても笑っていて欲しいもの。
その光景を現実にするためには、対話を持って溝を埋めていくしかないんじゃないかって思った。

④支援者とは
これは、教員に向けて・・・自分のかかわった子どもたちが、学校を卒業した後、
どのような生活を送っているのか見て欲しい。
その姿を見て、自分は、学校は子どもに何をしてきたのか振り返って欲しい。
自分がアドバイスしたことが、子どもにとって、親にとってどういう効果があるのか、
自らを検証する勇気を持って欲しい。
そして、自分の知識と技術を今後、いかに働かせることが出来るかという
チャレンジ精神を持って欲しい。
『与えられる知識は応用が効かない、求める知識は知恵となる』の言葉をいただきました。

そして保護者に向けて・・・子どもは親の所有物ではない。
子どもは親が亡くなっても生きていかなければならない。
ひとりで生きていくスキルを身に付けられるような知識が必要。
子どもの将来を悲観して、勝手に命を絶つようなエネルギーは、
子どもが安心して暮らせるような社会を作る方向へベクトルを変えて欲しい、と。
今年に入ってから、県内でも数件、悲劇的な事件が起こっています。
障害のある子どもの将来を悲観して、親子で。。。なんて耳をふさぎたくなるような事件が。

確かに、Kは私の子どもだけれど、Kの未来は私のものじゃない。私の思うように動かしてはいけない。
だったら、Kが自分で好きなものを選び、やりたいことが一つでも叶うような環境を、社会を
私は整えてやらなくちゃ！と思いました。

親は、子どもの第1のサポーターである。子ども自身が自分の気持ちや意見を上手に表現できれば
そりゃ、それが一番良い。しかし、残念だけれどもそれが出来ないのが障害。
先生方と親は、平面(フラット)な位置で対話することが大切。

決して、親がうるさいから、とか思わないで欲しい。と私は思った。

親は、子どものこと、心配で心配でたまらないんです。
学校でどんなことがあったと話せない我が子が、
学校から帰ってきても落ち着かずにイライラしていたら、「何があったのかな？」と思うのは当たり前。
先生からの報告は大切だしありがたい。
でも、悲しいかな先生のお話の中に「あれ？」と思う事だってあるんです。

親は決して「親にしかわからないのよ！」なんて思ってない。
先生に言われて気づく事だってたくさんあるよ！

本当に大切なもの＝子どもの身になればわかる！

このことをいつも胸において置いて欲しいだけなんです。

決して、先生の評価じゃなくて、周りにどう思われるかじゃなくて。
子ども自身が心の底から笑顔で過ごせているか？ってことを。

date: 2006/07/18 12:03

2006年7月25日(火)

7月の特別支援教育講座は。。。

7月の特別支援教育講座は，西多賀病院元指導室長の阿部幸泰先生をお招きした。

梅雨空に下，仙台から奥様の運転での来石で，恐れ入る。

阿部先生のホームページは，早速，アドベンチャーのHPからリンク可となったので，ご覧いただきたい。
先生の紹介の中で，私が述べた先生の著書「改訂版　重い障害のある子どもへの援助のためにー重症心身障害児教育入門ー」の注文もできる。

さて，阿部先生の話の中心は，障害のある子の親と，如何に向き合うかという問題であった。
親の心情，親の生き方が語られ，平行して，障害者の自立とは，コミュニケーションとは何かが明らかにされた。

支援者の側に立つ人間として，「専門家は，指導や助言以上に，親の不安感を取り除いてください。親にエネルギーをいっぱい与えてください。そうすれば親子で前向きに生きていく勇気が生まれます。それは，障害を治すことと同じくらい，いえ，それ以上にありがたいことです。」というおそらくは親の言葉を，忘れてはいけない。

さらに，
「相手を理解するのではなく，相手が自分を理解者と認めてくれる関係を築くこと。」これで，やっと，支援される人と，支援する人が対等の関係になれるのかもしれない。

特別支援教育体制が整備されつつある。大きな課題は，教員の指導力の向上と，県民の理解促進と言われる。この県民の中には，当然のことながら障害児の親が含まれる。親に受け入れてもらえなければ，LD，ADHDの通級指導も始まらない。

だからこそ，支援者側が，支援者として認めてもらえる力や知恵を磨く必要がある。指導力向上と理解促進は，同じ事の表裏である。
阿部先生の言葉を借りれば，それは，「プロの資質→知識と技術に裏打ちされた智恵をいかに働かせるかのチャレンジ精神と，自らを検証する勇気」を求め続けるということになろうか。

作成者 スーパーバイザー　kazu先生：2006年7月25日(火) 10:36